

鶏肉

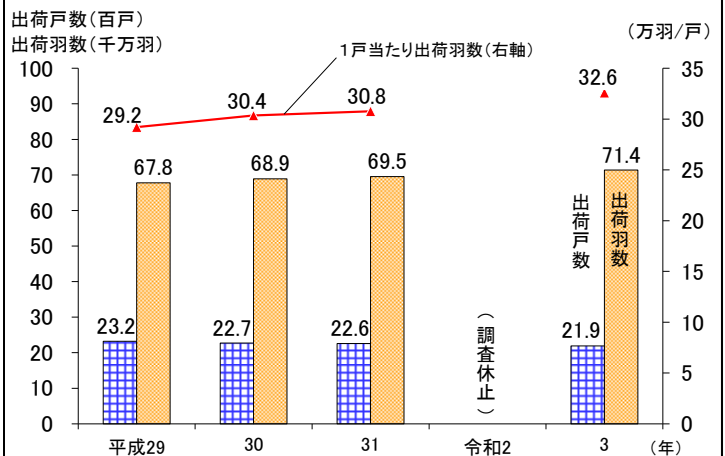
◆飼養動向

3年2月現在の出荷羽数は平成31年比2.7%増

ブロイラーの飼養動向は、小規模農家の廃業や大規模層（年間出荷羽数50万羽以上）のシェアの拡大を背景に、出荷戸数は減少傾向で推移する一方、出荷羽数は増加傾向で推移している。

令和3年のブロイラーの出荷戸数は2190戸（平成31年比3.1%減）と平成31年をやや下回った（図1）。また、出荷羽数は7億1383万4000羽（同2.7%増）と31年をわずかに上回った。この結果、1戸当たりの出荷羽数は32万6000羽（同5.9%増）と31年をやや上回った。

図1 ブロイラー出荷戸数および出荷羽数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
注1：各年2月1日現在。
注2：令和2年は農林業センサス実施年のため、調査休止。

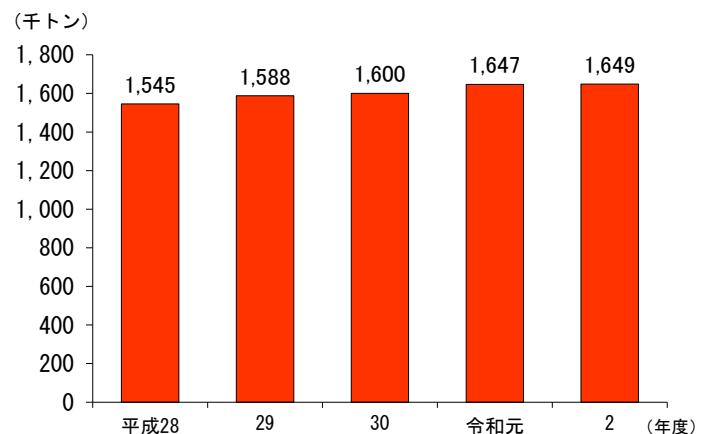
◆生産

2年度の鶏肉生産量、前年度比0.1%増

鶏肉の生産量は、消費者の根強い国産志向や健康志向などを背景に増加傾向で推移している。

生産量は、平成23年度以降、10年連続で前年度を上回って推移している。令和2年度は164万8625トン（前年度比0.1%増）と過去最高となった（図2）。

図2 鶏肉の生産量の推移



資料：農林水産省「食鳥流通統計」、「食料需給表」より農畜産業振興機構推計
注：骨付き肉ベース。

◆ 輸 入

2年度の鶏肉輸入量は前年度比3.4%減、鶏肉調製品は前年度比7.7%減

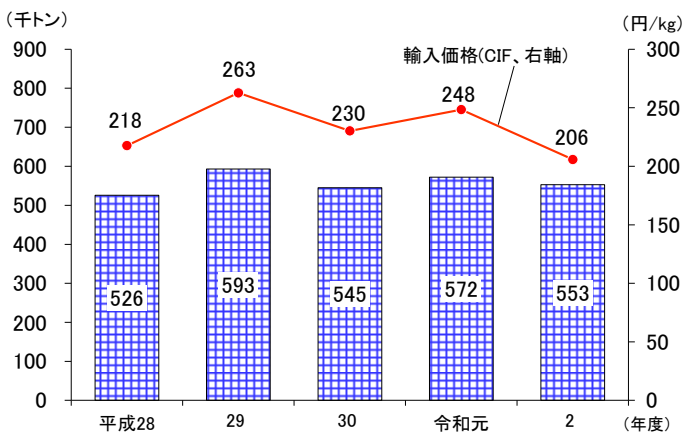
鶏肉

鶏肉の冷蔵品は消費期限が短いことから、輸入品のほとんどは主に加工・業務用向けに利用される冷凍品である。

鶏肉の輸入量は、近年、加工・業務用向けの需要が高いため、増加傾向で推移しており、平成29年度に過去最高を記録した。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により業務用需要が減少する中、国内の輸入品在庫が高い水準で推移していたことなどにより、55万2832トン（前年度比3.4%減）と前年度をやや下回った（図3）。

輸入価格（CIF）を見ると、1キログラム当たり206円（同17.1%安）と前年度を大幅に下回った。

図3 鶏肉の輸入量および輸入価格の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：実量ベース。

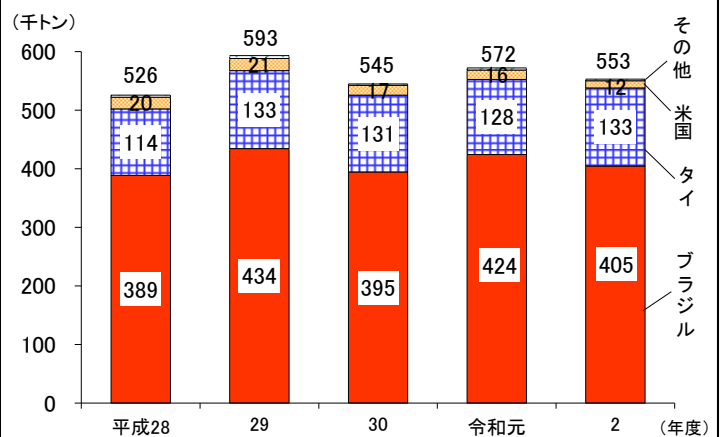
鶏肉の輸入量を国別に見ると、ブラジルが全体の約7割を占める最大の輸入先であり、タイ、米国がそれに続く。

ブラジルからの輸入量は、増減を繰り返しながらもおおむね増加傾向で推移してきたが、2年度は、40万4647トン（同4.7%減）と前年度をやや下回った（図4）。

タイからの輸入量は、近年増加傾向で推移しており、平成30年度および令和元年度は中国からの引き合いが強まったことなどにより減少したものの、2年度は、13万3362トン（同4.2%増）と前年度をやや上回った。

米国からの輸入量は、クリスマス需要向けなどの骨付きも肉が多くを占めている。2年度は、米国内で発生した高病原性鳥インフルエンザの影響などにより、1万2323トン（同23.3%減）と前年度を大幅に下回った。

図4 鶏肉の国別輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：実量ベース。

鶏肉調製品

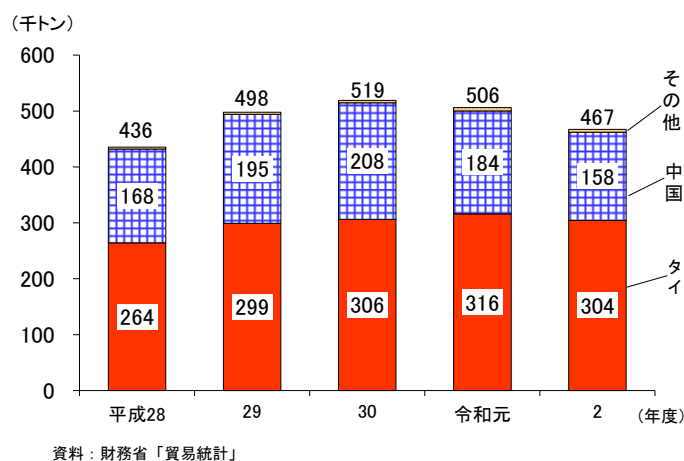
鶏肉調製品（加熱処理や衣付け、調味した鶏肉など）の輸入量は、近年、食の外部化（外食、中食など）の進展や主要輸入先における高病原性鳥インフルエンザの発生に伴う鶏肉の輸出停止による調製品への切り替えなどを背景に、増加傾向で推移している。主な輸入先は、加熱処理施設が多数存在するタイおよび中国で、両国からの輸入量の合計は全体の99%を占める。

令和2年度は、COVID-19の影響で外食需要が減少したことなどから、46万7304トン（前年度比7.7%減）と前年度をかなりの程度下回った。（図5）。

2年度の鶏肉調製品の輸入量を国別に見ると、タイからの輸入量は、30万4150トン（同3.8%減）と6年ぶりに前年度を下回った。なお、輸入量に占める割合は65%となった。

中国からの輸入量は、15万7741トン（同14.3%減）と2年連続で前年度を下回った。なお、輸入量に占める割合は34%となった。

図5 鶏肉調製品の国別輸入量の推移



◆消費

2年度の推定出回り量は前年度比0.3%増、家計消費量は前年度比11.7%増

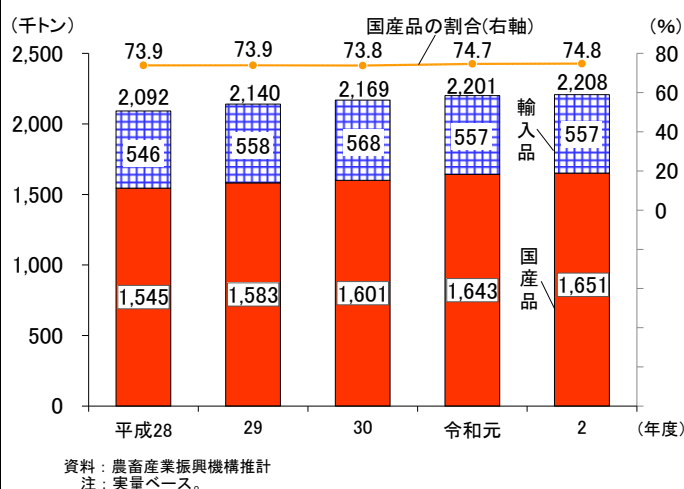
鶏肉の推定出回り量は、近年、消費者の健康志向などを背景に、増加傾向で推移している。

全体の約4分の3を占める国産品は、仕向け先の大半を占めている家計消費が好調なことから、増加傾向で推移している。令和2年度は、COVID-19の影響による巣ごもり需要の増加などにより165万966トン（前年度比0.5%増）と10年連続で前年度を上回り、過去最高となった。

主に加工・業務用利用されている輸入品は、外食や中食需要の高まりにより、近年増加傾向で推移してきたが、2年度は、COVID-19の影響により外食需要が減少したものの、空揚げなどの持ち帰り需要の増加などにより、55万7136トン（同0.1%減）と前年度並みとなった。

この結果、2年度は220万8102トン（同0.3%増）と16年連続で前年度を上回り、過去最高となった（図6）。なお、合計に占める国産品の割合は74.8%（同0.1ポイント増）となった。

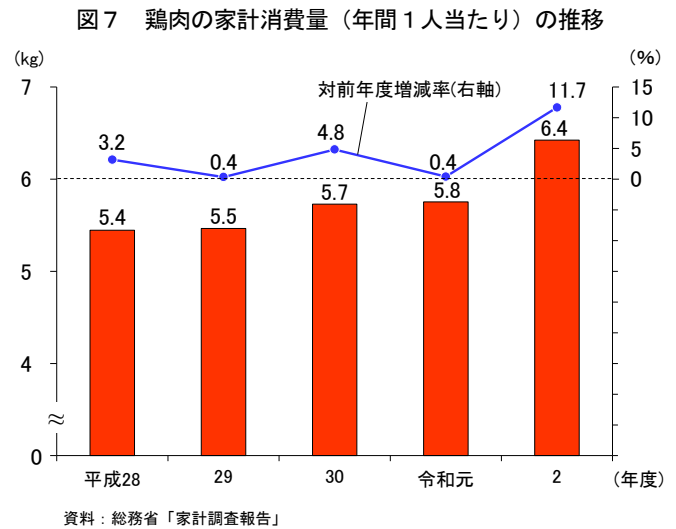
図6 鶏肉の推定出回り量の推移



家計消費

鶏肉消費量の約4割を占める家計消費量は、消費者の健康志向を反映し、増加傾向で推移している。

令和2年度は、COVID-19の影響による巣ごもり需要の増加により、年間1人当たり6.4キログラム（前年度比11.7%増）と10年連続で前年度を上回り、過去最高となった（図7）。



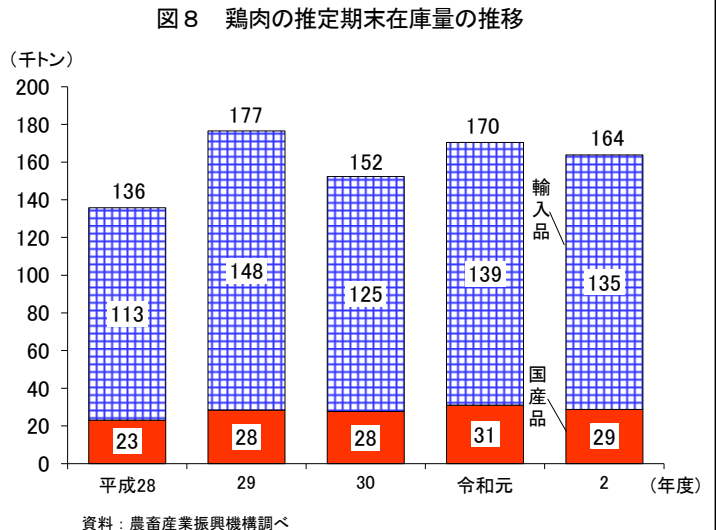
在庫

2年度の推定期末在庫量、前年度比3.9%減

鶏肉の推定期末在庫量は、その8割以上を輸入品が占めることから、輸入量の動向に大きく左右される。

令和2年度は、COVID-19の影響による巣ごもり需要の増加で国産品の出回り量が増えたことや国内の輸入品在庫が高い水準だったため輸入量が減少したことなどから、16万3802トン（前年度比3.9%減）と前年度をやや下回った（図8）。

このうち、輸入品は13万5022トン（同3.1%減）とやや、国産品は2万8780トン（同7.5%減）とかなりの程度、いずれも前年度を下回った。



卸売価格

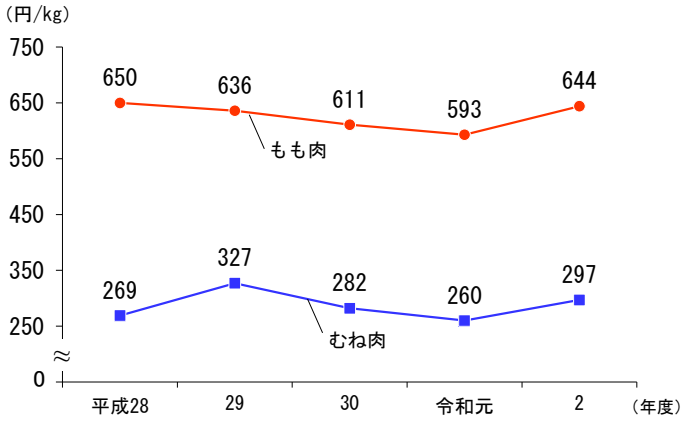
2年度の鶏肉卸売価格、もも肉は前年度比8.6%高、むね肉は前年度比14.2%高

国産鶏肉の卸売価格（ブロイラー卸売価格・東京）は、日本では、「もも肉」に対する消費者の嗜好しこうが高いことから、価格水準が「むね肉」に比べて2～3倍高くなっている。「もも肉」は、主にテーブルミートに仕向けられており、「むね肉」は総菜やチキンナゲット、ソーセージなど主に加工・業務用利用が多くなっている。

「もも肉」は、COVID-19の影響による巣ごもり需要の増加から量販店を中心に引き合いが強く、

1キログラム当たり644円（前年度比8.6%高）と前年度をかなりの程度上回った（図9）。「むね肉」は、COVID-19の影響により外食需要は減少しているものの、加工用および量販店需要が好調だったことから、同297円（同14.2%高）と前年度をかなり大きく上回った。

図9 国産鶏肉の卸売価格（東京）の推移



資料：農林水産省「食鳥市況情報」
注：消費税を含まない。

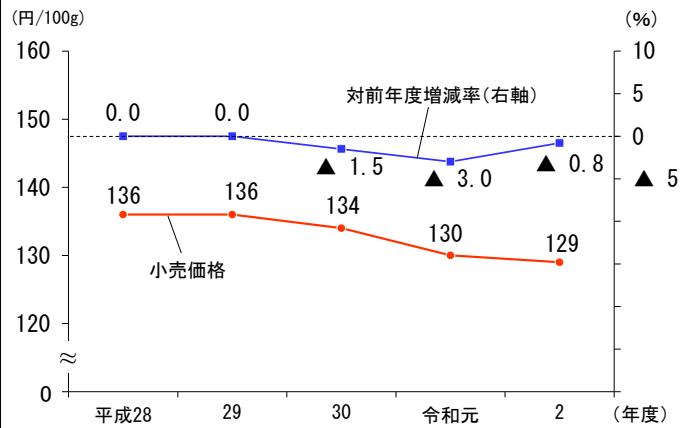
◆小売価格

2年度の小売価格（もも肉）、前年度比0.8%安

鶏肉の小売価格（もも肉・東京）は、消費者の健康志向や他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な需要を反映し、近年は、100グラム当たり135円前後で安定的に推移していた。

2年度は2年12月～3年3月は前年同月の水準を上回って推移したものの、2年4～11月はおおむね前年同月の水準を下回って推移した結果、2年度の価格は同129円（前年度比0.8%安）と、前年度をわずかに下回った（図10）。

図10 鶏肉の小売価格（もも肉・東京）の推移



資料：総務省「小売物価統計調査報告」
注：消費税を含む。